

## 平成 30 年度 学校評価報告書（総表）

令和元年 6 月 3 日

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属久里浜特別支援学校	校長名	西垣 昌欣
幼児・児童・生徒数	53	学級数	18
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<p>○子供一人一人の良さや可能性を伸ばし、自立し社会参加するための基礎を培うことを目指す。</p> <p>本校には、知的障害に自閉症を併せた子供たちが在学している。子供たちの障害の状態及び発達段階、特性等は多様である。個々の子供の多様な実態に応じて、適切な指導を行い、それぞれのもっている可能性を最大限に伸長することが本校における教育の基本である。</p> <p>特に、子供一人一人の良さや可能性を伸ばすとともに、それぞれの発達段階に応じた知識・技能等の習得を図り、自立し社会参加するための基礎を培うことを目指す。</p>		
② 学校経営方針	<p>○教職員、保護者、関係者が連携し、一人一人の子供が「確かに育つ学校」を目指す。</p> <p>本校は、これまで知的障害に自閉症を併せた子供たちのための教育課程を開発してきた。この数年は、その教育課程を基盤に、一人一人の「思いや考え」を大切に、望ましい行動を育てる実践を重ねてきた。こうした経緯を踏まえ、今後は、一人一人の子供が「確かに育つ学校」を目指す。</p> <p>子供を確かに育てるためには、一人一人の過去の成長の経過を踏まえ、現在の教育的ニーズに合致した指導をしなければならない。子供にかかわる関係者が情報や知恵を結集し、指導に当たることが求められる。指導の根拠を明らかにしつつ、指導を評価し改善することを重ねることによって、子供の成長を追求することが可能となる。そして、子供が「確かに育つ」ことを関係者とともに見直し、それを国内外に向け発信することによって、筑波大学附属学校として求められる先導的拠点、教師教育拠点、国際教育拠点としての役割を果たしていく。</p>		
③ 重点目標	<p>○知的障害のある自閉症児一人一人が「確かに育つ授業・生活づくり」を追求する。</p> <p>○実践を振り返り改善を重ねることを通して、よりよい教職員として成長する。</p> <p>○保護者及び関係者と連携し、子供が育つ学校・家庭・地域づくりを進める。</p>		
④ 前年度の成果と課題	<p>(成果)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教職員全体で、幼児児童の正確な実態把握に務め、指導課題の精選と根拠に基づく指導計画の立案や授業の実施・改善ができるようになってきた。</li> <li>・日々の実践をもとに、外部向けの公開講座や教員研修を数多く企画し、教師教育の拠点としての機能の強化が図れた。</li> <li>・「のびのびまつり」というイベントを通じて、地域の福祉、教育、医療等の関係機関との連携を密にして、本校に在籍する子供たちや卒業生の生活しやすい環境づくりに着手することができた。</li> </ul> <p>(課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本校の研究活動や授業実践等の成果を広く発信していくための方策を検討する必要がある。</li> </ul>		

### 3 重点目標達成についての総括的評価

・指導の実践を通して、知的障害を伴う自閉症児の自立活動の指導と音楽の授業づくりについてまとめ発表することができた。また、「幼児期の指導において大切なこと」、「長期に渡った指導の事例」など、これまでとは異なった視点で実践研究をまとめることができた。

・子供のねらいに応じて寄宿舎生活体験入舎を行った。学級・寄宿舎・家庭とが連携・協力し、小学部の通学生の約半分が経験し、身辺自立の力も高まってきた。

・昨年度に引き続き、地域との連携を深めるために、本校主催で「のびのびまつり」を実施した。今年度は、本校で職場実習を行った近隣にある神奈川県立の養護学校の和太鼓部の生徒たちが演奏をしてくれた。また、父親の会が綿菓子屋を出店し大盛況だった。約300人が参加し、本校の子供たちも楽しめ、地域の様々な人とのつながりも深まったイベントになった。

### 4 来年度の学校課題

- (1) 知的障害のある自閉症児一人一人が「確かに育つ授業・生活づくり」を追求する。
- (2) 実践を振り返り改善を重ねることを通して、よりよい教職員として成長する。
- (3) 保護者及び関係者と連携し、子供が育つ学校・家庭・地域づくりを進める。
- (4) 学校の管理運営を見直し、多様な意見が生かされ働きやすい環境づくりに努める。

### 5 学校課題に向けての具体的な取り組み

・自立活動の授業を基盤としつつ、各教科等の授業づくりについて検討する。その際、授業研究会を重視する。

・幼稚部、小学部、両部を通した事例研究（寄宿舎における指導、保健及び栄養の指導を含む）を検討する。

・地域の関係者との連携により修学支援・家庭支援を推進する。行事や広報により地域との幅広い協力関係を作る。

・仕事の進め方や勤務時間等を考慮するなど、一人一人の教職員が当事者意識をもち、働き方改革の主体者となる。

### 6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

平成30年度自閉症教育実践研究協議会 実践研究集録

# 学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

学校名	筑波大学附属久里浜特別支援学校
-----	-----------------

項番	評価項目	具体的評価結果
1-2-1	学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況	昨年度作成した各教科等の年間指導計画と個別の指導計画、個別の教育支援計画の書式を用いて、スムーズに連動するようになってきた。各学級の授業を中核として進めることで、教職員間の共通理解を図った。また、学部会でも共通理解を図るようにした。
1-2-10	児童生徒の実態を踏まえた、個別指導やグループ別指導、習熟度に応じた指導、補充的な学習や発展的な学習など、個に応じた指導の計画状況	幼児児童の実態を的確に把握するために発達検査等のアセスメントを実施し、それらを日々の様子と照らし合わせ、一人一人の幼児児童の個別の指導計画を作成し、それらに基づいて指導を進めた。ねらいや活動に応じて個別やグループ別、集団での指導を計画し実施した。グループや集団での活動では一定の成果が上がっているが、個別の指導については、個々の教師の指導力の向上が必要である。
3-1-4	保護者や地域社会、関係機関等との連携協力の状況	今年度も在籍する幼児児童及び保護者に対して関係者が集まりサポート会議を開いた。解決が長引いている案件については当該の関係機関に働き掛けているが進まない面もある。また、今年度は「自閉症の子供を理解するための学校公開」を開き、三浦海岸共同生活について発表し、参加した他の附属学校の生徒と本校の児童とでシンポジウムを行った。約100人の参加があり、障害のある子供たちを理解するいい機会だったという高い評価であった。
3-1-6	児童生徒の出席率及び遅刻の状況	出席率100%の幼児児童が全体の17%、90～99%が全体の80%、80～89%が全体の3%であり、高い出席率であった。日々の健康管理に対する保護者の協力によるところが大きい。また、幼児児童の生活のリズムが安定していることでもある。一方で、ほとんど毎日遅刻する児童が1人いるので、送迎ヘルパーなどの支援を受けているが、今後とも対策を講じていきたい。
3-2-8	児童生徒の生活習慣の定着や人格的発達の状況	幼児児童の生活全体を把握し、それぞれの子供に応じた身辺自立の力の向上と定着を図った。特に、生活体験入舎では家庭での身辺自立についても保護者と協力して実態を把握した上で指導計画を立て取り組んだ。また、全教職員が一人一人の子供の生命や人格を尊重した教育を進めるためには、更に子供の発達について理解を深める必要がある。
5-1-4	危機管理マニュアル等の作成・活用の状況	地震津波などの自然災害や火災等緊急事案、不審者対応など、適切に対処ができるように、各種訓練を校内の危機管理委員会で計画し、全教職員で実施し、マニュアルの見直しを行ってきた。隣にある特別支援教育総合研究所の職員や研究員にも見学してもらったが、来年度は災害時の具体的な協力について訓練を通して明確にしていく予定である。

6-1-1	特別支援学校と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	小学部においては、地域の小学校と年4回の交流及び共同学習を実施した。本校の児童も相手校の児童も会えるのを楽しみにしていた。相手校の特別支援学級の児童1名も一緒に参加した。来年度は、相手校から1回増やしたいという意見が上がっている。幼稚園は視覚特別支援学校幼稚園と親子餅つき交流会を実施した。
8-1-1	授業研究の継続的实施など、授業改善の取組の状況	学部ごとまたは学校全体で授業研究会を定期的を実施した。特に、学級ごとに日々の授業の評価・改善を、単元計画、学期の指導計画の改善に生かし、年間指導計画の作成ができた。教材研究の工夫や教科間のつながりを明らかにしていくことが今後の課題である。
14-1-2	大学との連携・協力	大学生や大学院生の卒業論文や研究の協力を行った。教育実習、介護等体験、また、看護学類の4年生の実習を受け入れた。看護学類の実習については、本校での体験を通して障害のある子供たちの理解が深まるように進め方を改善する予定である。また、自閉症教育実践研究協議会に大学の野呂先生に指導助言者として参加していただき、全体での協議を深めることができた。
14-1-3	先導的教育研究	知的障害を伴う自閉症児の自立活動の指導、音楽の授業づくりについて、授業実践を基にまとめ発表した。また、入学前の幼児児童の家庭生活支援を始めた。寄宿舎の生活体験入舎のノウハウと併せて、自閉症児の早期の生活支援や家庭療育について開発していきたいと考える。先駆的に取り組んでいるノースカロライナ TEACCH センターで3名の教員が研修を受けた。
14-1-4	教員養成・教師教育	各県の教育事務所の指導主事や特別支援学校の教員、教職大学院生（現職教員学生）など、様々な立場にある教員に対して、ニーズと期間を把握し、研修の内容と構成等を考え、相手方に提案した上で、本校での研修を実施した。体験活動や授業見学、授業検討会、指導事例の発表、講義など行った。
14-1-5	国際交流・国際貢献	年間を通して中国、韓国、マレーシアの特別支援教育に携わる方々約60人の見学や研修の受け入れを行った。子供たちは来校者に元氣よく挨拶をしたり、自分の得意なことを見せたりして交流を深めていた。